

2007年2月プレスリリース

山口情報芸術センター(YCAM)presents

日本の若者たちの抱く、とらえどころのない現実感を巧妙に描く

おかだとしき

岡田利規主宰 チェルフィッチュ、山口初登場！



2006年3月「三月の5日間」より Photo:横田徹

YCAM パフォーマンス ラウンジ #1

演劇公演

チェルフィッチュ 「三月の5日間」

作・演出：岡田利規

2007年4月29日(日・祝) 14:00 開演

山口情報芸術センター スタジオ B

主 催：財団法人山口市文化振興財団

制作協力：プリコグ

企画制作：山口情報芸術センター



この春、演劇はもとよりダンスや社会学の分野から注目されている岡田利規主宰の演劇ユニット チェルフィッチュがついに山口初登場します。作品は、2004 年岸田國士戯曲賞を宮藤官九郎と並んで受賞した「三月の 5 日間」。イラク空爆開始日の前後 5 日間、渋谷のラブホテルで過ごした男女を描いた作品です。

■10 年にひとりの逸材！と岸田國士戯曲賞選考会で絶賛された岡田利規の作品。

岡田利規の作品は、俳優たちが織りなす動きやセリフが特徴的です。ただらと手足をもてあそぶような動き、主語が省略されて接続詞が何度も繰り返される会話。街角で見かける 10 代や 20 代前半の一見脱力感溢れる様子を、計算し尽くされた動きやセリフにして舞台にのせ、彼らの焦燥感やその世代特有の社会問題をあらわにします。そのスタイルは新たな演劇作法を誕生させ、話題となっています。

例えば、作品の出だしで俳優は、舞台上に登場して次のように話し始めます。

俳優 1： それじゃ『三月の 5 日間』ってのをははじめようと思うんですけど、第一日目は、まずこれは去年の三月っていう設定でこれからやっとうって思ってるんですけど、朝起きたらなんか、ミノベって男の話なんですけど、ホテルだったんですよ朝起きたら、なんでホテルにいるんだ俺とか思って…

舞台上の俳優は、行動の当事者となって物語を展開していくのではなく、入れ替わり立ち替わりしながら、“彼”から聞いた話を観客に説明するスタイルで話を展開していきます。世界中が震撼した事件“イラク空爆”が起きている中、渋谷のラブホテルで過ごす男女の事件らしい事件の起こらない 5 日間。岡田利規による真に「現在的な表現」の提示です。

ぜひこの機会に、チェルフィッチュ「三月の 5 日間」をどうぞご紹介いただきますよう、よろしくお願いいたします。

* 「三月の 5 日間」は、山口公演の後、5 月初旬に福岡イムズホールでも上演されます。

新シリーズ「YCAM パフォーマンス ラウンジ」誕生！

山口情報芸術センターでは、2007 年春より新しい舞台作品シリーズ「YCAM パフォーマンス ラウンジ」をはじめます。ここでは、新しい表現の可能性を提示する作品を、約 100 席の小規模で紹介。舞台と客席が一体となった親密な空間で、俳優やダンサーの熱気や息づかいを直に感じ、アーティストの鋭い視点への驚きやその可能性を体感できる作品のラインナップを行います。

ここでは、観客が、国内外で次々と生まれる新しい表現者や作品の多様なスタイルに触れ、自分だけのお気に入りのアーティストを見つけたり、また作り手とアフタートークを通して交流したりできる活気ある場を創出します。

ストーリー

2003年、アメリカ軍がイラク空爆を開始した3月21日(アメリカでは20日)。戦争反対のデモに参加した人、それを見ていた人、そして偶然デモに参加したカナダのバンドのMCがライブのステージでした体験談を聞く人など、彼らを取り巻く、この空爆の日を境にした5日間のストーリー。事件らしい事件の起こらない日々が世界的な事件との対比をみせ、観客に現実を突きつける。

◎岡田利規よりコメント

「三月の5日間」は、2003年3月のイラク戦争開戦前後に渋谷のラブホテルで5日間を過ごす男女のことなどを描いた作品です。先日、この作品がTV放映されたのを見たという内閣官房にお勤めの方と、どういうわけか話す機会がありまして、その人は『三月の5日間』の頃、バグダッドで人道支援物資の手配という激務に明け暮れていたそうです。この芝居の放映を見て、とてもショックだったと言っていました。自分が命懸けで生きていたあのときを、こんなふうにダラダラ過ごしていたやつらがいたのか、と。

それを聞いて、僕もむろんのこと「まあ、そりゃあショックですよ、……」と思いました。

ともあれチェルフィッチュは今年、この「三月の5日間」でもって、初の本格的なツアーに出かけます。春から夏にかけて、国内外を回るのですが、その一番最初の公演場所がYCAMです。オープン当初からYCAMの噂は聞いていて、いつか行ってみたいと思ってました。今回このような機会を得ることができて、とても嬉しく思っています。

それにしても、あのイラク開戦からもう四年になるのですね。今年はイランで開戦してしまったりするのでしょうか？ どうか、もうそんなことがありませんように。ピース。

◎2006年3月「三月の5日間」舞台写真より



Photo.横田 徹

◎岡田利規 おかだとしき

劇作家、演出家、チェルフィッチュ主宰。1973年横浜生まれ。慶應義塾大学商学部卒業。1997年にソロ・ユニット「チェルフィッチュ」を旗揚げ。横浜 ST スポットを拠点に活動。「より遠くに行ける可能性のある作品」を生み出すため、ある方法論を持ちつつも、その方法論をそれ以上「引き寄せないように、それをいつまでも掴んでいないように、すぐに手放すように」心がけると



Photo:佐藤暢隆

いう、それ自体が不思議な方法論で演劇作業を実践する。2004年、『三月の5日間』で第49回岸田國士戯曲賞を受賞。選考委員からは、演劇というシステムに対する強烈な疑義と、それを逆手に取った鮮やかな構想が高く評価され、とらえどころのない日本の現在状況を、巧みにあぶり出す手腕にも注目が集まった。また特徴的な作風である特異な身体性は時にダンス的とも評価され、05年『クーラー』で振付家として「TOYOTA CHOREOGRAPHY AWARD 2005～次代を担う振付家の発掘～」最終選考会に出場。ここで提示した明確なコンセプトは、これまでの“振付”という概念を裏切り、観客の議論を引き起こす結果となった。

◎チェルフィッチュ chelfitsch

岡田利規のソロユニットとして1997年に結成。同年『峡谷』（横浜相鉄本多劇場）で旗揚げ。以後横浜を中心に活動を続ける。チェルフィッチュ（chelfitsch）とは、自分本位という意味の英単語セルフィッシュ（selfish）が、明晰に発語されぬまま幼児語化した造語であり、現代の日本、特に東京の社会と文化の特性を現したユニット名。2001年3月発表『彼等の希望に瞳れ』を契機に、現在の作品に見られるような超リアル日本語を使う作風に変化。ただだらとしてノイジーな身体性を持つようになる。現代の日常的所作を誇張しているような／していないような独特の身体的方法は時にダンス的とも評価される。主な作品として「マリファナの害について」（2003）「三月の5日間」（2004）「ポスト＊労苦の終わり」（2005）、ダンス作品に「クーラー」（2004）などがある。

関連イベント開催！！

「YCAM 茶話会～舞台が10倍楽しめる方法、教えます。 vol.2」

YCAM劇場担当スタッフ2名が、ダンス作品鑑賞を楽しむ為のポイントを、茶話会形式で解説する、鑑賞初心者向けのレクチャーvol.2。2回目の今回は、チェルフィッチュを中心とした、新たな演劇手法を模索する演劇人についてざっくばらんにお話しします。

4月15日(日) 14:00～15:30 山口情報芸術センター 1F Bit Things 参加無料

概要

YCAM パフォーマンス ラウンジ #1

演劇公演 チェルフィッチュ「三月の5日間」

作・演出：岡田利規

日時：2007年4月29日(日・祝) 14:00開演(30分前開場)
※終演後、ポストトークを行います。

会場：山口情報芸術センター スタジオB

料金：全席自由 一般 1,200円 any会員/特別割引 1,000円 ※当日は割引の対象になりません。

チケット情報：プレイガイド発売：3月2日(金)～

チケットインフォメーション 083-920-6111

ローソンチケット 0570-084-006(Lコード 63646)

主催：財団法人山口市文化振興財団

制作協力：プリコグ

企画制作：山口情報芸術センター

平成19年度文化庁芸術拠点形成事業

お問い合わせ：山口情報芸術センター 広報：小滝
〒753-0075 山口県山口市中園町7-7
TEL：083-901-2222 FAX：083-901-2216
E-mail：information@ycam.jp <http://www.ycam.jp>

■プレス用写真、映像をご入用の方は上記までご連絡ください。

岡田利規 記者懇談会開催！

いま、舞台界を騒がすチェルフィッチュ主宰 岡田利規を迎えて懇談会を行います。西日本初登場。ぜひご来場ください。

4月6日(金) 14:00～(予定) 福岡イムズホール ※福岡公演主催者と合同。詳細は追ってご連絡します。

■特別割引について

特別割引は、青少年(18歳未満)、シニア(65歳以上)、障害者及び同行の介護者1名が対象。

山口情報芸術センターのみの販売となります。

■託児サービス

対象：0才(6ヶ月)以上 託児時間：開演の30分前から終演後30分後まで

料金：お子様1人につき500円、2人目以降は1人につき300円

申込方法：4月22日(日)までにチケットインフォメーション(TEL：083-920-6111)までお申し込みください。未就学児のご入場はご遠慮ください。

<山口情報芸術センター(YCAM)へのアクセス>

■JR新山口駅から

- ・JR山口線湯田温泉駅下車、徒歩20分/タクシー5分
- ・JR山口線山口駅下車、徒歩20分/バス10分(中園町か済生会病院前下車)/タクシー5分
- ・防長バス/JRバス25分、中園町下車

■自動車利用

- ・山陽自動車道で防府東ICから30分/九州・中国自動車道で小郡ICから15分

2004年岸田國土戯曲賞選評より抜粋

野田秀樹

岡田利規氏の『三月の5日間』は、読み始めた瞬間から、え？ え？ え？ と思いながら奇妙な路地に迷い込んだ。そして、にやにやしつつ、一気に読めた。読み終えたら、渋谷のラブホテルから出てきていた。そういう感じである。同じところを何度も繰り返しながら、微妙にずれて、先へ進む。進むというより、落ちていく感じがある。しかも、下へ落ちるのではなく、上へ落ちていくような気がした。いわば、『逆さ蟻地獄』に嵌った感じである。渋谷の町を、ラブホテルへ逆さに引き返して行く件、決めたわけでもなく五日間ラブホテルで過ごす破目になっていく過程、そして、その五日の閉塞された享楽のうちに、始まったばかりのイラク戦争が終わってはいないかと、ふと頭をよぎる瞬間、その一つ一つが、実に生々しい今の若い日本人である。それを見事に描ききった岡田氏は、出会ったことのない才能である。いよいよ出てきたというべき才能かもしれない。或いは、どこに隠れていたのよ、というべき才能。もしかしたら、買いかぶりすぎと呼ばれるかもしれない才能。そう言われないうちにも、今後、どんどんいい作品を書いていただきたい。応援します。応援しますって言うのも、どうだろう。

井上ひさし

『三月の5日間』（岡田利規）は、遠くの戦争と、近くの、目の前のラブアフェアとを、絶妙の言語的詐術で対比させることに成功しました。登場人物たちの話す内容が微妙にズレながら進む展開も、背筋がゾクゾクするほどおもしろく、一見平凡と見えるプロット進行の下に、遠くの虐殺よりも目の前の性行為の方が重要という人間の業のようなものが浮かび上がってくるところに凄味がありました。

太田省吾

岡田利規の『三月の5日間』は、〈アンチ・テアトル〉作品である。〈テアトル〉に対して、その機構あるいは構造そのものを問いただそうとしている。そしてそこから生み出されたこの作品には〈テアトル〉を青ざめさせるものが秘められている。この作品は、たとえばこんなことばで書かれている。「それで（映画）終わったあともなんか話しかけてくんだよね！ っていうかなんか並んで映画館出ようとするんだよね『どうでした今のどう思いました』とか言って、や、なんかまあ普通に女の子の思春期みたいな、ワーみたいな、あっそうみたいな映画だったんじゃないですかねって言ったら『あ、はい、なんか〈あっそうみたいな〉ってのはすごいはい』とか（以下略）」渋谷の若者のあの、（私にはついていけない）あのことばで連綿としゃべられている。このしゃべりは、発話者自身でなく、ある男の行状をしゃべっている。この作品には〈役〉がない。七名の役者が登場するが、彼等はいわば舞台上に登場し、ある男の行状を観客に向かってしゃべる（報告）者でしかなく、〈役〉を形成する氏素性はなにも与えられていない。役を演じる〈それらしさ〉なしに〈テアトル〉を成り立たせることが探られての構想だったにちがいない。〈役を演じる〉という〈テアトル〉の基本要素が消去されようとしている。したがって、ここでの〈せりふ〉は、ある〈役〉が語るものではなく、これまでのことば＝主体という〈せりふ〉概念を壊したものである。ある男の行状が語られるわけだから、ここにはプロットは残されているといつてよいのだろうが、ことば＝主体＝役＝演技が構造を変えたところにおけるプロットであるから、これもずいぶん〈テアトル〉のプロットとは異なる。〈テアトル〉の三要素が疑われてこの作品は生み出されている。そして、この作品は、そうして生み出された故の、ある切実な希みが浮かびあがっている。「5日間」「ラブホ」にいつづけての朝、いつもの渋谷は〈世界〉あるいは〈この世の風景〉というあり方を得ているように感じられた。世界の新鮮さへのひっそりとした希いが、〈テアトル〉への〈アンチ〉によって語られようとしていた。